【解説】

元亀3年（1572年）、出雲国の鍛冶屋、中村三右衛門の娘として生まれた「阿国」は、歌舞伎の元祖として名高いが、元は出雲大社の巫女として仕えていた。歌舞伎は阿国が京都で男装の舞を演じ、大人気を博したことに始まる。女性が男装という「傾いた」（奇抜な身なりや言動）演出をしたことから、「歌舞伎」という言葉が生まれた。「時慶卿記」には慶長5年（1600年）に阿国が「ヤヤコ跳」を踊ったとある。幼女の遊びの様を舞に仕立てた可愛らしい踊りであったろうから、奇しくも「羽根の禿」を彷彿させるものであったと筆者は思う。

「かぶき踊り」は女性が踊るものであったのだが、各地の城下に存在した遊女屋に採り入れられて「遊女歌舞伎」となっていった。男装の遊女が女性である遊女と掛け合うセクシー舞台は、三味線のお囃子（伴奏）があって、全国で流行ったのだ。しかし、遊廓の外で上演される劇場の歌舞伎は、興行がセクシー路線に走ったのか、寛永6年（1629年）に風紀を乱すとして禁止されてしまった。以降は男性役者が女性の役も演じるようになって、今日に至っている。この禁令以前の、江戸の「桐座」は女芝居の劇場であった。女性の舞伎役者が舞台を務めていたのである。

その歌舞伎PRの図絵を解読すると、桐座で「羽　突　かふ濾」が興行されている。所謂「羽根の禿」である。この歌舞伎の外題は「重重人重歌曾我」であり、その演目の第二番目に瀬川菊之丞が演じるとある。外題の意味については歌舞伎研究者にお譲りするが、「羽根の禿」は元々、「春昔由縁英」という外題が示すところの、「変化物」の一つを指す。「変化物」とは、同一の役者が次々に役を変える演出であり、この外題のものは、五変化であった。「盧生」（「盧生の夢」の故事）、「禿」（羽根の禿）、「揚巻助六」、「白酒売」、「石橋」と展開する。いずれも同名の長唄として定着しており、別稿で現代語に翻訳してみようと思っている。

主役は瀬川菊之丞が踊る。ふり附は、西川扇蔵、長唄のタテ（主席）は松永忠五郎、三弦はタテ三味線が杵屋正次郎、以下、小鼓、大鼓、太鼓、笛の配役として、全部で十七名が書かれているから、結構な人数である。そしてこの図絵の版元は、葺屋町南側（現在の日本橋葺屋町）に店を構える、冨士屋小十郎とある。

さて、「禿」とはハゲのことである。オカッパに切り揃えた少女の髪は、長い髪が普通であった女性の髪型としてはハゲに近い、という揶揄でもあろうか。「禿」とは、「花魁」という格高の遊女に仕える見習いの女の子を指す。今の小学生の年代で、花魁が諸経費を負担していて、廓に住んでいた。

日本舞踊を習う女の子が「羽根の禿」をお稽古するのは、舞の所作がカワイイからである。当然、お師匠さんも親御さんも、遊廓のことを教えることはしない。設営された晴れの舞台では、遊廓の入口に掛けられた暖簾から、ちょこっと顔を出す少女の所作から始まる。お正月の一時の自由時間に、羽子板で遊び、手まりで遊ぶ様が、数え歌として挿入されている。

一方、歌舞伎で演じるのは大の男であるから、舞台背景によってなるべく舞手が小さく映るような工夫がなされ、当の役者も首振り、足踏み、などで少女の所作を可愛く演じねばならず、なかなか大変である。ま、歌舞伎は大方が女性客で、お目当ての男性の役者を観に行くのだから、きゃー、カワイイーでイイのだ！

令和四年五月十九日

大中臣正比呂　記